

『張州雑誌』に登場するハッチョウトンボと思われる記述

小野 知洋

金城学院大学国際情報学部 〒463-8521 愛知県名古屋市守山区大森2-1723

A dragonfly described on the “Choshu-zassi” in the 18th century

Tomohiro ONO

Biological Laboratory, Kinjo Gakuin University, 2-1723 Omori, Moriyama-ku, Nagoya, Aichi, 463-8521, Japan

Correspondence:

Tomohiro ONO E-mail:tono@kinjo-u.ac.jp

要旨

ハッチョウトンボ *Nannophya pygmaea* は、江戸時代の文化・文政年間（19世紀前期）に、現在の名古屋市北区から東区にかけての矢田川沿いに生息していたことから、当時の地名であった「矢田鉄砲場八丁目」にちなんで名づけられたと言われている。この根拠になった大河内存真の記述では、「この地域にのみ発見せられ」としていることから、ハッチョウトンボはおそらく大河内存真または同時代の人々によって発見されるとともに、命名もされたものと考えられてきた。しかし、筆者はこの時代よりさらに数十年遡る18世紀中期から後期にかけて、内藤東甫が著した『張州雑誌』の中にハッチョウトンボと思われる記述を見出した。これがハッチョウトンボであれば、これまで知られた中で最古の記述であるとともに、本種の存在が18世紀中期から後期にはすでに知られていたこととなる。

はじめに

ハッチョウトンボ *Nannophya pygmaea* は世界最小のトンボ亜目種としてよく知られている。本種は東南アジアから我が国にかけて広く分布している。我が国では、九州から青森県まで分布しているが、生息場所は水深の浅い湿地環境に限られており局所的である。愛知県内には東海丘陵要素植物群と呼ばれる固有の植物が分布する小規模な湧水湿地が点在しており、ハッチョウトンボはここにも広く分布している。しかしながら、近年、各湿地とも環境の変化にともなって個体数の減少や絶滅がみられることから、現在では良好な湿地環境が維持されているかどうかを示す指標としてもしばしば紹介されている。このトンボは、世界最小という特有の形態から古くから存在が知られており、江戸時代の尾張藩の博物学者が著した文書にもその記載がみられる。本稿では、名古屋とゆかりの深い本種の記録・記載について、新たな知

見を得たので紹介する。

ハッチョウトンボの命名の諸説

ハッチョウトンボの名前の由来については多くの書物や資料で取り上げられ、ほぼ統一的な見解が示されているので、まずは改めてこれを紹介する。

江戸時代後期の文化・文政期（文化年間は1804-1818年、文政年間は1818-1830年）は尾張藩における博物学の勃興期であり、多くの著名な博物学者が登場するとともに、さまざまな動植物の記録や記載がなされている。ハッチョウトンボについてもこの時期の明確な記載が知られている。尾張藩の医師で博物学者でもあった大河内存真（1796-1883）は、彼がシーボルトに贈った『蟲類寫集』の説明書の中にハッチョウトンボについて記述している（上野1987）。上野（1987）の著書『日本動物学史』に記述されている関連部分をそのまま引用すると、「八

七、ハッチョウトンボ、赤卒(アカトンボ)の一種、その形はアカネトンボと同様なれども、アカネトンボよりは小形である。これは日本に於てヤダノテツポウバハッチウメ(矢田鉄砲場八丁目)にのみ発見せられ、その為にハッチョウトンボの名を有する(雄).」[「八八、ハッチョウトンボ、赤卒の一種(雌).」となっている。すなわち、この発見地名がハッチョウトンボの和名の由来であるというものである。大河内存真のこの記述については、同時期に活躍した尾張藩士の博物学者吉田雀巢庵(1805-1859)が、『蜻蛉譜』というわが国最初とされるトンボ類図鑑にも紹介しており、そこでは「大暑ノ節矢田河原ノ八町場ニ産ス故ニ名ク」(『彩色江戸博物学集成』(平凡社1994)に掲載の資料の記載で、東京大学総合図書館所蔵のものを転載している。なお、名古屋市鶴舞図書館所蔵の『蜻蛉譜』(小鹽五郎模写)の覆刻本では「大暑矢田河原ノ八町場ニ出ル故ニ名アリ」と表記しており、それぞれの写本で説明文が微妙に異なる。上野(1987)は後者の記述を紹介している)としている。

これらの記述に登場する「矢田鉄砲場八丁目または八町場」の位置については、矢田川の河川敷のどこかであることは確かであるが、現在はその地名は残っていない。矢田川河川敷は「鉄砲場」という名のとおり江戸時代に射撃訓練場として利用されていた。安田(1986)は尾張藩の鉄砲場の変遷に関する調査から、射撃の発射地点は時代によって多少変わるものの、おおよそ現在も残る長母寺(名古屋市東区矢田)付近であり、射撃は矢田川の上流に向けられたとしている。さらに、その発射地点を起点として1町(約109m)ごとに松が植えられたとも記述しているので、仮にこの距離をもとに「矢田鉄砲場八丁目または八町場」を八番目の位置と推測するならば、長母寺を起点におおよそ850~900m上流の河川敷となり、現在の名古屋市東区大幸町の宮前橋のやや下流付近に当たる。なお、平凡社刊の『彩色江戸博物学集成』において、吉田雀巢庵の解説をしている小西正泰は、矢田八町場を現在の名古屋市東区大幸公園付近と記述しており、これは上記推測地点とほぼ一致する。ただし、小西正泰が何を根拠としてこの地点を特定したかについての記述はない。いずれにしてもピンポイントの地点はともかく、「矢田鉄砲場八丁目または八町場」は現在の名古屋市北区から東区にかけての矢田川河川敷のどこかに該

当すると思われる。

ところで、吉田雀巢庵の『蜻蛉譜』においては、描かれた図とその解説は雌についてのみである。筆者は名古屋市鶴舞図書館所蔵の『蜻蛉譜』を閲覧したが、雄の記載や図画はない。しかし、ハッチョウトンボは雌雄の色彩が異なり、雄が赤い体色であることについては、本種を別名「コアカネ」としていること、上記の『蟲類寫集』の説明書では雌雄を明確に区別して記述していることから、明らかに認識していたはずで、吉田雀巢庵は何らかの理由で雌のみを描くにとどめたのであろう。いずれにしても、これらの記載は大河内存真、吉田雀巢庵という博物学者として評価の高い人物によるものであり、記述内容の具体性からみても、ハッチョウトンボの命名の由来として信頼に足るものと言えよう。

なお、これ以外にも命名の由来に関する記述は存在する。例えば東海地方におけるトンボ研究の第一人者であった松井(1957)は、「ハッチョウトンボは、江戸時代の文化・文政期からこの名で呼ばれていたようですが、その名の起りは、最初に尾張国八丁畷で採集されたためということです。しかし、八丁畷が現在の何れの地点を指すかについては異見があるようです。」と紹介している。松井(1857)はもちろん上記の矢田河原の説も紹介しているが、これ以外に、木村(1952)の記述を紹介しており、「わが国でははじめ愛知県の八丁畷(今日の熱田の東方という説と岡崎の近くだという説がある)で発見されたところからハッチョウトンボと名づけられたという。」との説も挙げている。筆者も木村(1952)の記述を確認したが、文中に根拠となる文献等は示されていない。熱田の東方説について、松井(1952)は「今日の熱田の東方」というのは、現在の名古屋市瑞穂区の神明町、市バス松田橋停留所附近のことで、ここにある明治天皇覧穂碑には八丁畷の地名が明らかに刻まれている。昔はこの地方に水田や湿地が散在し、ハッチョウトンボが生息していたということは充分推察出来る。現在、覧穂碑のあるところに僅かに水田が保存されているが、或はここからこのトンボが発見されるかも知れない。又全地産のハッチョウトンボの標本を所有している方もあるかも知れない。」と述べているが、自らの見聞にもとづく記述のみで、その根拠となる文献等については明示していない。

この説については、確かに可能性の一つではあるかもしれないものの、かといって、松井が述べるようにこの地にハッチョウトンボが分布していたことが仮に確認されたとして、ハッチョウトンボの分布地はそれほど限定的ではないので（現在でも、個体数の減少は危惧されるものの、かなり多くの分布地が知られているし、過去には、名古屋市内および周辺の各地の湧水湿地等にはかなり普遍的に分布していたと思われる）、命名の根拠となるかどうかは疑問である。なお、この場所は瑞穂区東ノ宮神社にあたり、筆者も現地を確認したが、「明治天皇八町畷御野立所」の碑が境内に立つのみで、現在は繁華街の真ただ中で水田等の痕跡はまったくない。

岡崎説については、木村（1952）自身も上述の記述以外に特段の説明はなく、この説を積極的に示す根拠はない。

以上の記述をあらためて総合すると、ハッチョウトンボの名前の由来として最も信頼できるのは大河内存真の記述であると思われ、矢田川周辺の「八丁目」または「八町場」にちなんで命名されたと考えて異論はないようである。

ハッチョウトンボの発見

では、ハッチョウトンボはいつの時代に発見され、世に知られるに至ったのであろうか。命名の由来に関して上に述べたように、江戸時代文化・文政期にすでに記載がなされていたので、この時代以前に本種が発見されていたことは言うまでもない。筆者はこれまで過去の資料等から考えても、大河内存真の記述で「矢田鉄砲場八丁目にのみ見られる」と記述されていることから、たとえ大河内自身ではないとしても同時代の人たちによって発見、命名されたものと考えてきた。ハッチョウトンボの命名に関する記述のある文献、例えば、新修名古屋市史（1997）や磯野・田中（2010）の考察もこれに沿ったものと言える。

ところが、最近、筆者は文化・文政期を数十年遡る時代の文献の中に明らかにハッチョウトンボと思われる記述があることを知った。『張州雑誌』は尾張藩士で画家でもあった内藤東甫（1728-1788）によって著された尾張地誌で、各地の産物、風俗を地域ごとに詳細に記録したものであり、内藤東甫の死後に100冊にまとめられたもの

である。この94巻に矢田村の紹介があり、その「土産」の項に「赤蜻蛉」が記載されているのであるが、これがその内容からみて明らかにハッチョウトンボであると思われるのである（図1）。

その項の全文を現代文として紹介すると、以下のとおりである。

赤蜻蛉

矢田河原に一種の赤卒（せきそつ・赤トンボ）がいる。形は甚だ小さくて色は赤い。通常のものとは異なっている。『本草綱目』のなかで李時珍（明代の本草学者）が言うには、小さくて赤いものは「赤卒」「●●」「赤●」「天雞」などといわれている。『造化権輿』（唐代の典籍と思われる）によると「水蠶」（ヤゴ）は●（蜻蛉の別字か）に化ける。また、羅願（人名と思われるが特定できない）が言うには、「水蠶」は蜻蛉に化ける。すなわち、蜻蛉は水上で交わり、物に付けて卵を散らし、「水蠶」になる。今、矢田河原に生息しているのは何から孵化したものか、わからない。形状は図の通りである。

注）（ ）内は筆者付記、活字がない文字については「●」で記述している。

図1のとおり、欄外に2頭のトンボの図があり、この図が実物大とすればハッチョウトンボにおおよそ相当する大きさである（今回筆者が確認した覆刻本は原本を80％程度に縮小しているようなので、その点を勘案すると、原図の体長は17-18mm程度となる）。なお、図面は無着色のスケッチであるが、「赤卒」と記されていることから、ハッチョウトンボのオスの成熟個体を示していると考えればよく符合する。さらに、形が「甚だ小さく」「通常見かけるものとは異なっている」ことを特記していることは注目すべきである。例えば、いわゆるアカトンボのグループ（アカネ属）内で我が国最小のヒメアカネは、図鑑等の記載では体長が34mm前後とされており、一般に平地でよく見かけるアキアカネ（体長40mm前後）に比べて確かに小さいことは事実である。もちろん昆虫の体サイズには大きな個体差があるので、これよりかなり小さい個体が時に出現することは事実であるが、「甚だ小さく」「通常見かけるものとは異なっている」という強調された表現を考えると、単に小型のアカトンボを示すと

は思われず、体長わずか18mm前後というハッチョウトンボを示していると考えるのが妥当である。

ところで、ハッチョウトンボの記述が『張州雜志』において矢田村(矢田河原)の項に述べられていることは注目に値する。命名の由来とされる矢田鉄砲場すなわち矢田

河原は、まさにこの記述の場所であり、この地の周辺がハッチョウトンボの多産地であった可能性を示唆している。矢田河原周辺は江戸時代には湿潤で足場の悪い環境であり、それが名古屋城にとっては北東の自然の要害となっていた。したがって、城の防衛上、むしろ意図的に

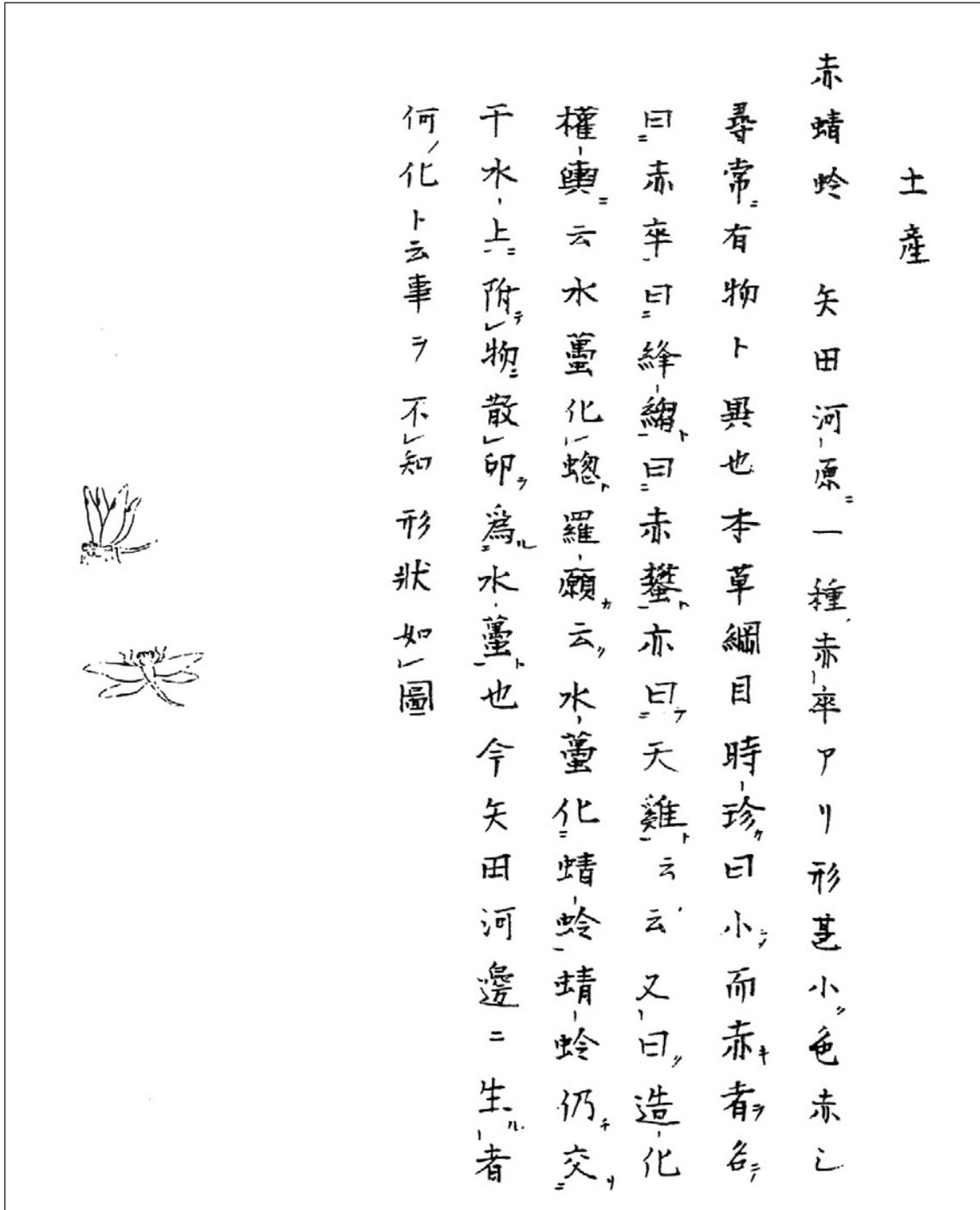


図1 『張州雜志』 94卷 における矢田村の中の「土産」の項の記述。
愛知県郷土資料刊行会出版の『張州雜志』の覆刻本より転載。

湿地状態が維持あるいは放置されていた可能性があり、結果として、ハッチョウトンボの生息環境としては適地であったのかもしれない。それだけでなく、しばしば氾濫する広大な河原は上にも述べたように砲術訓練の好適地として利用されていた(安田1986)。安田(1986)によれば、砲弾は武器が強化されるにもなって射程が延び、現在の千種区や名東区にあたる位置にまで到達したようである。期間の限定はあったとしても時に砲弾が飛び交うような環境では、当然、人々の活動は少なからず抑制されていたに相違ない。そのような背景が現在の名古屋市北区から東区、さらには千種区、名東区にかけて広範囲の矢田川河川敷に湿地性動植物を育む絶好の生息環境を提供していたことは十分にあり得ることである。さらに、本論で取り上げた者を含めて当時の本草学者や博物学者の多くが尾張藩士や藩医という立場でもあったことは、このような特殊な環境に立ち入り、調査を行うことを可能にしていたのではないだろうか。

仮にそのような立場上の有利さがあったとしても、この時代の自然に対する博物学的な関心のレベルを考えると、内藤東甫の自然の事物に対する関心の高さ広さは特筆すべきものである。『張州雑誌』の他の巻においては、現在は我が国では絶滅してしまった哺乳類の記載を始め、植物、昆虫類、魚類などの素晴らしい記載や描画があり、その後の尾張博物学の勃興を支える礎を垣間見ることができる。内藤東甫のそのような観察眼を考えると、ハッチョウトンボという特異な形態をもったトンボに注目し記録を書き残したのも、彼ならではの幅広い博物学的な関心と知識があったからに違いないし、その記述については非常に高い信頼をおけるものである。

いずれにしても、本稿で示したこの記述がハッチョウトンボを指しているものであるとすると、内藤東甫の活躍時期(1728年生~1788年没)からみて、大河内存真や吉田雀巢庵の記述(1820年代)よりも50年程度は古く、ハッチョウトンボの記録としては最古のものとなるであろう。なお、大河内存真や吉田雀巢庵はこの記述の存在を知っていたかどうかとの疑問が湧くが、筆者は彼らがその存在を知らなかったのではないかと考えている。その理由として、上述した彼らの記述内容から過去に見出されていた種を改めて記載しているとは思われないこととともに、もう一つの理由がある。『張州雑誌』覆刻本に

記されている市橋鐸氏の解説では、『張州雑誌』はまとめられた直後に藩主に献上されて藩の秘庫に収められ、明治期に至るまで人の目にふれることがなかったとされている。そうであれば、藩士という立場であったとしても彼らの目に触れる可能性は低い。したがって、彼らの上述のハッチョウトンボに関する記述は、『張州雑誌』の記述とはまった独立した「再」発見にもとづくものと推測される。

謝辞

本報告のきっかけとなった資料、すなわち『張州雑誌』(覆刻本)をご恵与下さり、情報提供をいただいた柴田美子氏(水源の森と八竜湿地を守る会代表)に心よりお礼申し上げます。この資料を現代文に読み解いていただいた白根孝胤氏(中京大学)、および資料内の典籍等に関してご教示いただいた西原一幸氏(金城学院大学)にも深甚の感謝を申し上げます。なお、図1の掲載については、愛知県郷土資料刊行会のご了承を得た。

引用文献

- 磯野直秀・田中誠. 2010. 尾張の嘗百社とその周辺. 慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学, 47: 15-39
- 木村幸雄. 1952. ハッチョウトンボの新産地. 採集と飼育, 14: 36-41,47
- 松井一郎. 1957. 八丁蜻蛉名義考. 森林商報, 新55号
- 新修名古屋市史編集委員会. 1997. 新修名古屋市史第8巻. 第1章第3節 名古屋の生物. 成田務, 田中多喜彦, 石黒茂(著), 名古屋. 414pp.
- 上野益三. 1987. 日本動物学史. 八坂書房, 東京. 531pp.
- 安田修. 1986. 尾張藩矢田河原砲場に関する一考察(一). 鉄砲史研究, 178号1-17

資料

吉田雀巢庵『蜻蛉譜』については、『彩色江戸博物学集成』:小西正泰「吉田雀巢庵」の項(p385-397)(平凡社1994, 501pp)(本書の図は、東京大学総合図書館所蔵のもの)および名古屋市鶴舞図書館所蔵の覆刻本(小鹽五郎模写)を参考とした。また、内藤東甫『張州雑誌』については、愛知県郷土資料刊行会出版の覆刻本(1976)を参照した。

